

児童養護施設における心理的援助の構造と機能

—心理職員への半構造化面接を通して—

学校教育専攻
教育臨床コース
上田 尚子

指導教員 栗飯原良造

1. 問題と目的

平成11年度(1999)から厚生省(現厚生労働省)の通知により、児童養護施設に心理職員が配置されることが決まった。平成16年度(2005)の時点で、半数以上が心理職員を配置している(厚生労働省, 2005)と言われ、心理職員を配置する施設が増加している。

その中で、増沢(2004)が行ったアンケートによると「他職種との連携」、「生活場面での子どもとの関わり方、生活場面とセラピーとの境界設定」、「セラピーそのものの難しさ」について悩んでいる心理職員が多いことが分かる。「他職種との連携」については、心理職員および直接処遇職員の役割や専門性が確立されておらず、互いの仕事の理解が十分でないことがひとつの要因として考えられる。「生活場面での子どもとの関わり方、生活場面とセラピーの境界設定」については、外来型治療モデルについて学んでおり、生活に治療をどう位置づけ、統合するかについては応用問題で難しいと捉えているようである。また、「セラピーそのものの難しさ」については、入所児童がいかにか重症であるかに関係していることや、外来型の個別心理療法をそのまま行うことの難しさに直面している表れであると考えられる。これらの心理職員が悩んでいる3つの要素をみていく中で、児童養護施設における治療構造をどのように捉えて、どのような工夫をして、心理的援助を行っていくのか

という活動モデルが明確化されることが求められているように筆者は考える。そこで、心理職員にインタビューを行い、児童養護施設における治療構造のあり方を検討することを目的とする。

2. 方法

調査的面接法(半構造化面接)を用いて1時間程度の個別インタビューを行った。この際、調査対象者の語りを優先するなど、その進め方は柔軟に行った。調査の実施期間は、2007年10月から11月であった。

調査対象者は、X、Y、Z県の常勤心理職員7名(平均27歳、平均勤続年数2年11ヶ月)。インタビューの内容は、心理職員の役割について、個別心理療法の基本的な治療構造、生活場面での子どもとの関わり、直接処遇職員との関わり、の大きく4つに分けられる。

3. 結果と考察

インタビュー結果については、調査対象者の言葉をできるだけ使用し、内容とずれることのないように筆者がまとめた。この際、①基本的事項、②心理職員の役割、③個別心理療法の基本的な治療構造、④生活場面での子どもとの関わり、⑤直接処遇職員との関わり、について調査対象者それぞれの個別事例としてまとめて、考察を加えた。

4. 全体考察

1. 心理職員の役割、2. 個別心理療法の基本

的な治療構造（個別心理療法を行う目的、時間的な条件、空間的な条件、子どもの中で心理職員が共有されていること、開始するにあたって、中断をどうとらえるか、終結のあり方、秘密の保持のあり方、生活の場で起きたことを面接で持ち出すか）3. 生活場面での子どもとの関わり、4. 直接処遇職員との関わり、以上について7名のインタビューを通しての考察を項目ごとに行った。

5. 研究のまとめ

本研究では、児童養護施設における治療構造をどのように捉えているのか、加えて、どのような工夫のもとで個別心理療法が機能しているのかを明らかにした。

治療構造の大きな特徴として、施設内に心理職員が入る形で心理的援助を行っていることがあげられる。そのため、①信頼関係の形成が難しいなど治療構造に乗りにくい子どもを日常的なやりとりから面接室につなげやすい、②中断や終結後も見守っている人がいることを子どもに伝えられる、③直接処遇職員とのコミュニケーションが取りやすいがゆえに生活での心理的ケアにつなげやすい。これは、被虐待児への心理的援助に大きな意味を持つと思われる。その一方で、生活場面と面接室との距離が近いなどの物理的な構造や、心理職員が生活場面に関与する場合もあることにより、①生活場面と面接室との境界があいまいになりがち、②子ども達の中で心理職員が共有されているために、面接の中で、他児の影響を受けることがある。以上より、治療構造の緩やかさによるメリットがあるものの、‘特別な守られた空間’として面接室が機能していくためには、なんらかの工夫が必要であろう。

この中で、心理職員自身の中に面接室と生活場面の境界（以下、‘枠’とする）を作るとともに、その‘枠’を子どもに示す作業が必要になってくると思われる。インタビューの中であげられた、‘枠’を伝えるための「具体的行動」と筆者が推測したその行動にこめられた<意図>を例として示す。①「他児のことを聞かれても答えない」→<あなたの面接のことも他児に言わない>、②「見送る際、場所と時間をここまでと決める」→<面接室と生活場面の境界を伝えることで、面接室が特別な空間であることを伝える>、③「他児が面接室に侵入してきたときには、‘今は〇〇さんの時間だから’と伝える」→<この面接を他児に邪魔されないように、心理職員が守っている>。このような‘枠’が子どもに伝わる中で、‘面接室は特別な空間’‘自分の面接は守られている’‘自分のことをみて考えてくれている’と感じられることにつながり、外的な治療構造の緩やかな中で個別心理療法が機能すると推測される。各施設によって心理職員に求められるものは異なるが、個別心理療法を中心に置いている場合、この工夫はどの心理職員にも通じることだと思われる。しかしながら、生活場面に関与することにより、細かいところまで知られすぎてしまう子どものしんどさへの配慮など、‘枠’を伝えるだけでは解決できない面も多々ある。そのため、施設から求められる役割を含めて捉えた今ある治療構造を知っておく必要性を感じる。治療構造を知っておくことで起こりうるであろうことにあらかじめ目を向けての工夫やフォローにつながったり、治療構造から生じてくる子どもの複雑な気持ちに目を向けて考えられたりすると思われる。